

辻元清美の 永田町航海記

「四」カ月余りでよくここまで」と
実感したのは、七月二十七日に

盛岡で開催された「東日本大震災津波ボランティア連絡会議」でのこと。県内外のNPO・NGOと岩手県、政府が参加してこれまでの被災者支援と今後の復興に向けた連携を話し合った。

会議には釜石の「@リアスNPOサポートセンター」の鹿野順一さんも参加。お菓子屋さんだった鹿野さんは、店も家も流された。震災後の四月に初めてお会いしたのは釜石市内の壊れそうな建物の二階、土砂降りの日。県内NPOをネットワークして被災者支援や仕事作りに取り組む「いわて連携復興センター（いわて連携）」を立ち上げたいと言った。先は見えず暗かった。あれから三カ月。連絡会議でこの「いわて連携」が、県との協働による県内全域の仮設住宅の周辺環境調査報告や、被災者の仕事作りなどの取り組みを紹介。鹿野さんはじめ被災者自ら復興に向けて立ち上がり始めている。「遠野まごころネット」も連絡会議に参加。遠野のボランティア基地を初訪

リターンズ

97

イラストレーション/石坂啓



東北NPOが底力を発揮し始めた 復興に向け行政との連携強化を

問したとき、NPO法人格申請の相談を副代表の多田一彦さんから受けた。次の訪問時に寝袋持参で語り合い、「三陸海の盆」を開くのが夢と聞いた。その祭りが八月一日に実現。役場も流された大槌町に、三陸の町々から伝統芸能を持ち寄る。そして「まごころネット」はNPO法人格を取得した。宮城県では震災直後から県内外のNPO・NGO、県、政府、自衛隊による四者連絡会議で連携してきた。炊き出しや物資配布の調整作業に始まり、自衛隊撤収後も連携は続く。気仙沼市ではNPO・NGO二三団体と市、政府による連絡会議が始まった。福島県では六地区で孤立死防止など

仮設住宅の見守り事業を行なう「絆づくり支援センター」を立ち上げた。県の委託を受けたのは「うつくしまNPOネットワーク」。地元NPOや福島大学との連携で「ふくしま連携復興センター」も立ち上げ、設立集会に参加。各地で登録・参加の個人ボランティアは六〇万人突破。各種団体も入れると一〇〇万人？「自衛隊に次ぐマンパワー」として復旧に向け大きな力を発揮している、と認識を」と政府会議で言い続けた。たかがボランティアという反応の官僚もいたが変わってきた。

今地元NPO・NGOが「東北の底力」を発揮し始め、復興に向け県や国との更なる連携が始まっている。阪神淡路のときにはなかった官民連携のスタイル、「新しい公共」の実践だ。まちや経済の復興だけでなく、心と絆の復興ができてこそ本当の復興。私は、苦しみの中から日本社会の質を変えられる可能性を感じている。復興対策本部の事務局は女性ゼロから一三四人中一二二人に。まだ少ないけど、平野大臣にガミガミ言った成果？「菅さんはいつ辞める？」とよく尋ねられるが、さっぱりわからないし政局に齟齬そごヒマもない。今週末も枝野官房長官と被災地へ。皆で希望の種をまくために。(つじもと きよみ・衆議院議員)